



小田小だより

平成26年 2月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 TEL.045(775)3011
<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/> 横浜市立小田小学校

「ふくはーうち」と心のもちよう ～節分の日に思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄



10月号に続き、私の昔話を聞いてください。私の父と母の話です……。父も母も身体障害者でした。きつとつらい思いを沢山してきたであろうに、いつも明るく前向きにものごとを考える二人でした。

例えば、父はご飯時にいつも「おお、うめえ（うまい）！」を連発しました。ご飯を一口食べると「おお、うめえ！」と言い、味噌汁を一口すすると「おお、うめえ！」と言う。うまかろうとまずかろうと全てのおかずに対してそう言い、最後に「ああ、うめがった（うまかった）！ごっそうさん、母ちゃん！」と言って箸を置くのでした。

そう言う習慣は子どもの私にも身に付きました。「ほんとだ。うめえ！」と言うと、不思議なことに本当に美味しく思えてくるのです。一種の自己暗示です。お陰で私には嫌いな食べ物は一つ無くなりました。

母も家族から料理をいつも褒められるのですから、食事時は笑顔が絶えませんでした。母は家族のために、あれやこれやと考えて毎日料理を作っているのですから、それを「まずい！」と言われたら、母の苦労は否定されたも同然です。母が不愉快になれば、父も私たち子どもも愉快ではありません。料理を美味しくするもまずくするも、ものごとを面白くするもつまらなくするも所詮は自分しだいだと父は考えているようでした。

母の場合は、自分が嬉しい、楽しい、美味しいと感じたことやものは、皆で分け合おうとする（皆に安売りしている？）人でした。

こんなことがありました。母が近所の家に呼ばれた際に、お茶菓子に醤油せんべいが出ました。その醤油せんべいがよほど美味しかったらしく、母は一枚もらって帰ってきたのです。夕方、遊びから帰ってきた私と兄に、「今日うめえせんべいをごっそうになった。すごくうめがった（美味しかった）から、一枚もらってきた。ほら、食ってみろ。」母がそう言いながらエプロンのポケットから出したせんべいは、灰色っぽいチリ紙に包んでありました。母はせんべいに張り付いてしまった灰色っぽいチリ紙を一生懸命取った後に、半分に割って私と兄に手渡しました。手に取った醤油せんべいにはチリ紙がまだ付いたままで、口にするとやけに紙っぽい味がしました。それなのに母は「なあ、うめえべ（美味しいだろう）？」と何度も聞いてくるのです。仕方なく「うん。」とうなずくと、恥ずかしそうに『「せんべい、一枚くんねえが（くれませんか）？」って頼むのは恥ずかしかったけど、もらってきてよかった。』と、にこにこしながら言うのです。

母は、祝い事の席に招かれても、出されたお膳料理にはほとんど箸を付けずに、折りに詰めて持ち帰ってきました。そして家族4人で、それはそれは楽しく食べるのが常でした。父が、「出されたお膳は全部食べてこいや。」と言って送り出しても、必ず持ち帰ってきました。宴席で、酒も飲めない母が、お茶だけを飲みながらどうやってその時を過ごしていたのでしょうか？

五十の後半を迎えた今になっても、そんな母のことを思い出すと、目頭が熱くなります。

書道家、相田みつをの作品に「うばい合えば足りぬ。分け合えば足りる。」という言葉がありますが、母は「こんな面白い話を聞いた」「こんな嬉しいことがあった」と言っっては、家族みんなに自分の喜びを安売りする人でした。

「福は一家（うち）！」

もうすぐ節分。「福」は既に一人ひとりの心の中に住んでいて、心のもちようで目の前に現れてくるのかもしれない。